



Title	シントラにおける芸術の変遷と歴史
Author(s)	長南, 有美
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71924
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	ちょうなん ゆみ 長南 有美	学部 学科	外国語学部 外国語学科	学年	2 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	平田恵津子	所属	言語文化研究科		
研究課題名	シントラにおける芸術の変遷と歴史				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
本研究の目的は、ムーア人の城跡、レガレイラ宮殿、シントラ宮殿、ペーナ宮殿の4つのシントラの文化財には、様々な芸術様式が混在していることを分析し、各々の文化財が建設された時期の歴史と芸術の変遷の関連性を明らかにすることである。研究方法としては、ポルトガルの歴史とシントラの文化財にみられる建築様式・装飾品を資料に基づき、これらの文化財を比較・分類する。また、直接現地に赴くことで資料では感じることができない芸術特徴を直に感じ、再分析して、歴史と芸術の関連性を明らかにすることである。 ◇シントラでの活動 日時：2018年9月14日～19日 場所：ポルトガル,シントラ（ムーア人の城跡、シントラ宮殿、レガレイラ宮殿、ペーナ宮殿） ◇広報 ・Facebookでの共有 ・「グローバル寺子屋薙中塾」の企画勉強会で取り上げられる ◇研究経過（資料に基づく記述と現地で感じ取ったこと） 以下、シントラの4つの文化財を個別に扱い、各文化財に関する歴史と芸術様式の変遷を叙述する。 ムーア人の城跡 Castelo dos Mouros 711年、西ゴート王室の内紛に乗じて半島に侵入してきたイスラム軍は、グアダレーテの戦いでイベリア半島を支配下におさめ、西ゴート人達はピレネー山脈に引きこもることを余儀なくされた。しかし、739年にアルフォンソ1世が即位し、レコンキスタ（キリスト教国によるイベリア半島の国土					

回復運動)を開始した。レコンキスタは1492年のグラナダ陥落まで続いた。(金七, 2010, pp.43-49)このような歴史的背景があり、イベリア半島における築城の技術は早い時期から発展されてきた。アルフォンソ1世はガリシアとレオンの領域からイスラム教徒達を追い払い、築城と城塞を築いて自領の支配権を強化したことも背景にある。イベリア半島のキリスト教徒の王たちは早くから、石造城塞を用いることで利益の維持を図っており、その多くはイスラム教徒達を破り、攻略することで築城を修正・模倣していった。レコンキスタが約8世紀にわたって長期的になったのは、石造建築の奪い合いに化したことが要因の一つである。一方、イスラム教徒達もイベリア半島で見つけた築上郡を占領して運用しながら、改良を行い、自らの工学技術を高めた。他のヨーロッパ諸国が自らの築城技術を発展させていた一方で、イベリア半島の人々はイスラムの築城建設法を取り入れていったのである。

シントラの「ムーア人の城跡 (Castelo dos Mouros)」にも上記の事柄が当てはまる。8世紀にムーア人によって建設され、10世紀に、コルドバのカリフが城塞を建築し、行政的にこの地域を支配した。1109年にはノルウェーのSigurd1世が城に侵略し、1147年にはアフォンソ・エンリケス王によって落城され、イスラム教徒達による支配を終わらせた。このような歴史的背景によって、ムーア人の城跡には戦闘的・威圧的特徴の建築様式が表れている。ムーア人の城跡は、ムデハル様式(別名アンダルシア様式)と呼ばれ、8世紀のアル・アンダルスの地に起源がある。ムデハル様式は土・砂利・石灰・藁でできたコンクリートを用いるという特徴がある。10～13世紀にかけ、巨大貯水池や、主力城壁と橋でつながった城塔群が備わるなど、少し変更が加わりながらイベリア半島に根付いていった。1839年には、フェルナンド2世の主導による修改築が行われ、自由な様式(estilo livre)から19世紀ロマン主義嗜好へと変化した。修復は度々されていたが、現在残っている城壁は少なく、廃墟のようになっている。(J.E. Kaufmann, H.W. Kaufmann, 2012, p.288)



←岩の上に石造建築が建てられている。



←岩を取り除くことなく、そのまま塀の一部として使用している。

ムデハル様式に加えられた、主力城壁と橋でつながった城塔群→



シントラ宮殿 Palácio Nacional de Sintra(Palácio real)

1147年、シントラはアフォンソ・エンリケ (Afonso Henrique) によって征服され、8世紀にイスラム人によって建設された城を支配した。15世紀から16世紀初頭にかけての建設されたため、ゴシック様式、マヌエル様式、イスラム風建築が混在している。城の大部分は、1415年頃から始まったジョアン1世が後援した建設計画で建てられた。16世紀にマヌエル1世によって建物増設や装飾が行われた。マヌエル1世の治下でマヌエル様式が発展し、また、イスラム建築の復古であるムデハル様式も発達した。この15世紀から16世紀の間、大航海時代の莫大な富が使われた。シントラ宮殿には東洋の陶磁器や棚が数多くあり、それらは当時とても珍しく、高価であったことから、王家はこぞって手に入れようとした。(Stephens,2017,p.139)



↑小ドームの奥行のように見えるのはペイント



↓アラブの間のアズレージョ



←マヌエル様式の白鳥の間



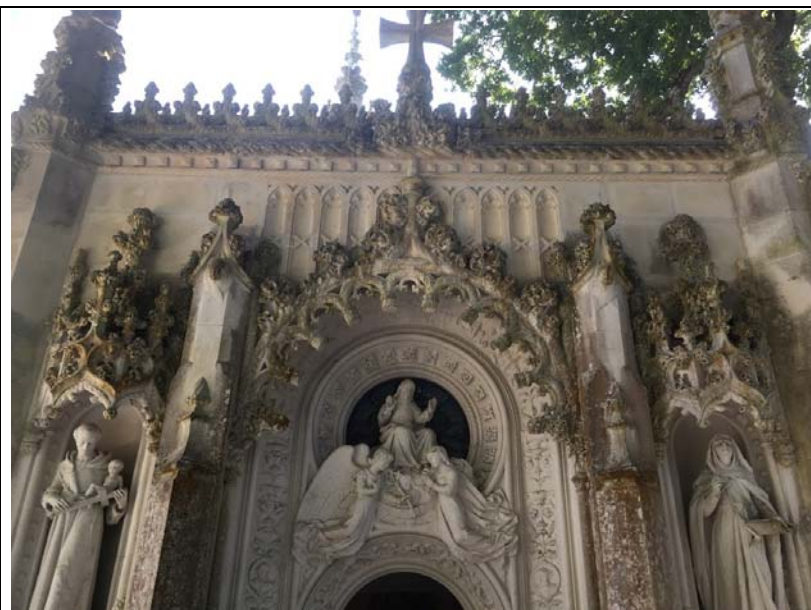
←高価であった東洋の陶磁器は、権力と財力を象徴するものであった。

レガレイラ宮殿 Palácio Quinta da Regaleira

17世紀に王族の別荘として建てられた館を、1715年にフランシスコ・アルベルト・ギラマインス・デ・カステロ（Francisco Alberto Guimarães de Castro）が買い取り、水路を作った。その後はAllenと呼ばれるポルトワイン商人の娘に相続され、レガレイラ宮殿の女男爵の称号が授けられた。20世紀初めにブラジル出身の富豪アントニオ・カルヴァーリョ・モンテイロ（Antonio Carvalho Monteiro）が買い取り、イタリアの建築家ルイジ・マニーニが改装を担当した。ゴシック、ルネサンス、マヌエルなどの様々な建築様式が混在する。また、秘密結社やテンプル騎士団のシンボルが施されているのが特徴的である。（Delgado, 出版年不明, p.22）



←秘密結社のシンボル

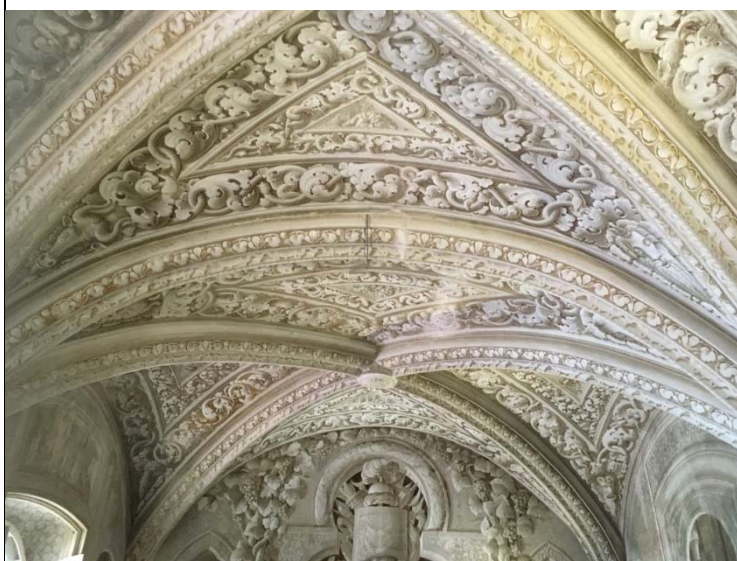


↑ 豪華な装飾がされたゴシック様式

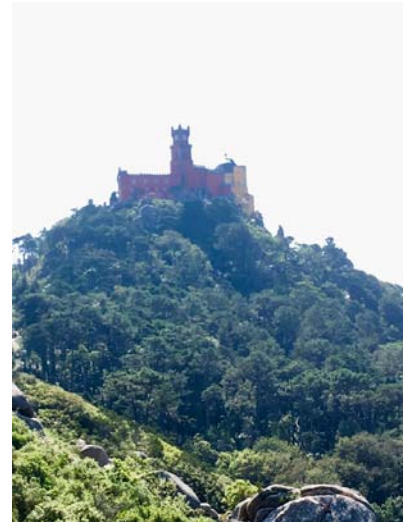
ペーナ宮殿 Palácio Nacional da Pena

ジョアン 2 世の治世に建設された旧フラデス・ヒエロニミタス修道院をモデルに、新しい修道院をマヌエル 1 世が山の上に建設した。しかし、1755 年のリスボン大地震により大崩壊すると、1836 年に女王マリア 2 世の王配フェルナンド 2 世がペーナ宮殿を建設した。フェルナンドは、異国風の豊富な種類の樹木を植えてイギリス式公園をつくることを考えていた。違う様式の模倣と組み合わせによって、不思議な美しさが表れている。違う様式の混合は、中世のビザンチウム様式、ゴシック・リヴァイヴァル建築様式、ネオ・マヌエル様式、ネオ・イスラム様式、ネオ・ルネサンス様式などの芸術様式に表れている。また、エジプト、日本、中国、インド的要素も含む。ポルトガル共和国が宣言され、君主制が廃止された 1910 年まで、王家はペーナ宮殿を使用した。

(Stephens, 2017, p. 306)



←一見、石彫刻に見えるが、実際には遠近法を用いたペイント



↑ 山頂の巨大岩の上に建設されている

◇考察

これらの文化財に共通している点は、「様式の混在」である。

イスラムの影響を強く受け、ムデハル様式や、西洋美術様式であるゴシック様式、マヌエル様式、ルネサンス様式なども影響されている。そして、ゴシック・リヴァイヴァル建築様式、ネオ・マヌエル様式、ネオ・イスラム様式、ネオ・ルネサンス様式など、様々な様式の混在によって生じた様式がある。そして、ムーア人の城跡から考えられるように、シントラにおける様式の混在は、イベリア半島での北アフリカの人々との攻防から始まると考えられる。

シントラを訪れる前は、王家が財力を見せつけるために華美な建物を作り続けていたため、様々な様式が密集していたと考えていた。しかし、これらの芸術様式の混在は、度重なる改築・改増修による結果であると考えられる。そして、なぜ新しく建設するのではなく、改築・改増修なのかが、財力の見せつけと様式の混在の鍵となると考える。長年によって様式の混在がなされた理由の最大の要因は、材木の運搬の困難さであると考えられる。シントラにおけるこれらの文化財は、地理的に山沿や山頂に立地しており、材木の運搬が困難であるのだ。(Delgado, 出版年不明, p.16) 実際、文化財を訪れる際に、道が狭く込み入っていて、山の斜面がかなり急であった。現地調査では、既存の岩の使用や遠近法を用いたペイントによって装飾を施すなど、工夫されていたことが確認できた。既存の建築物に付け足すような形で、新たに必要なる材木の量を抑え、建物をより豪華にしていたと考察できる。

そして、そこまで工夫して建物を美しく・広く見せようとしたのは、王家や富豪が自らの権力や財力を見せつけ、威厳を保つためだったのではないだろうか。芸術の変遷とは、各時代の権力者によってなされる。

さらに、ここにはポルトガル人の精神性も関連していると考えられる。

saudade と呼ばれる懐古主義的なポルトガル人特有の精神性によって古き良き建築部分をそのまま残したのではないだろうか。また、イベリア半島における攻防の歴史によって、イスラムの文化や技術が身近にあり、それらを吸収していった歴史的背景から、枠組みにとらわれずに異なるものを融合させようとする精神性もあるのではないだろうか。

【参考文献】

金七紀男（2010）「ポルトガル史」彩流社

Delgado, Nelida（出版年不明）“Sintra” ESCUDO DE ORA

Kafumann ,J.E. , Kafumann ,H.W. “The Medieval Fortress” Da Capo Press

Stephens, Henry Morse “PORTUGAL A HISTÒRIA DE UMA NAÇÃO”